



北京市高等教育精品教材立项项目

日本古典文学史

主编 关立丹

编者 刘雨珍

张新英 周以量

丁莉



北京语言大学出版社
BEIJING LANGUAGE AND CULTURE
UNIVERSITY PRESS



日本古典文学史

主编

关立丹

北京语言大学

教授 文学博士 博士生导师

编者

刘雨珍

南开大学

教授 文学博士 博士生导师

丁莉

北京大学

副教授 文学博士 硕士生导师

张新英

北京语言大学

副教授 文学博士 硕士生导师

周以量

首都师范大学

副教授 文学博士 硕士生导师



北京语言大学出版社
BEIJING LANGUAGE AND CULTURE
UNIVERSITY PRESS



图书在版编目(CIP)数据

日本古典文学史: 日文 / 关立丹主编. -- 北京: 北京语言大学出版社, 2013. 4

2009 年北京市精品教材建设项目

ISBN 978-7-5619-3465-4

I. ①日… II. ①关… III. ①日语—高等学校—教材 ②日本文学—古典文学—文学史 IV. ①H369.4: I

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2013) 第 051840 号

书 名: 日本古典文学史
RIBEN GUDIAN WENXUESHI

责任印制: 陈 辉

出版发行: 北京语言大学出版社

社 址: 北京市海淀区学院路 15 号 邮政编码: 100083

网 址: www.blcup.com

电 话: 发行部 010-82303648 / 3591 / 3650

编辑部 010-82303393

读者服务部 010-82303653 / 3908

网上订购电话 010-82303908

客户服务信箱 service@blcup.com

印 刷: 北京中科印刷有限公司

经 销: 全国新华书店

版 次: 2013 年 6 月第 1 版 2013 年 6 月第 1 次印刷

开 本: 710 毫米 × 1000 毫米 1/16 印张: 19.75

字 数: 322 千字

书 号: ISBN 978-7-5619-3465-4 / H · 13020

定 价: 48.00 元

凡有印装质量问题, 本社负责调换。电话: 82303590

序

宿久高

由北京语言大学日语系教授关立丹博士主编的《日本古典文学史》即将付梓，这是对我国日语教学和日本学研究的又一贡献。立丹博士请我作序，并寄来了全部稿子。我认真研读了这项聚集了五位博士心血的最新研究成果，受益颇多，感慨颇多。

我国改革开放以后，作为高等学校日语专业本科生、研究生用日本文学史教材，最早出版的是吉林大学王长新教授编写的日文版《日本文学史》，1982年由外语教学与研究出版社出版，教育部指定为全国通用教材。随着我国日语教育的不断发展和教学的实际需要，近30年间，又有多部各有特色的日本文学史教材问世，但大多是日本文学通史或日本近现代文学史，日本古代文学史十分少见。从这个意义上说，立丹博士主持完成的“北京市精品教材建设项目”、“教育部特色专业建设项目”《日本古典文学史》，具有填补空白的意义。

该教材有以下特点：

一、编者学历高，专业造诣深。日本古代文学史，从断代史的角度又分为上古、中古、中世、近世四部分。参加编写的执笔人，分别都是上述不同领域的专家。他们均在国内外著名高校研习多年，获得了博士学位，取得了很好的研究业绩，而且一直工作在日语教学和日本研究的第一线，有较丰富的教学经验和敏锐的学术触角，有体得，有创获，保证了教材的确切性、学术性和实用性。

二、视野开阔，主体意识强。在国内外已有研究成果的基础上，强调了日本古代文学与中国古代文学的关联和中日文学比较的视角，为中国学生学习日本古代文学，全面了解日本古代文学在中国古代文学影响下发生、发展，最终创造出富有日本民族特色的日本文学的发生、发展史，提供了一个新的角度。

三、编写科学，融科学性和实用性为一体。在阐述日本文学史实的同时，不仅适当加入了古文选段的现代日语译文，给作家、作品名等难读的固有名词注出了读音，还在每个章节之后加入了“学习之窗”，介绍日本文学的相关常识，以激发学生的学习兴趣，达到预期的学习效果。

尤其可喜和值得一提的是，该教材的编者都很年轻。他们不仅学历高，专业造诣深，而且思想活跃，思维敏捷，执着向上，燃烧着勇于创新、敢于挑战的学术激情，是我国日语教育和日本学研究的未来。

我由衷地祝贺他们取得的每一项成就，由衷地期待他们为我国的日语教学和日本学研究奉献更多更好的学术成果。

是为序。

中国日语教学研究会名誉会长

宿久高

吉林大学外国语学院院长、博士生导师

2012年12月20日于长春

前 言

本教材是北京市精品教材建设项目，同时是教育部特色专业项目建设的一部分。

内容包括上代文学、中古文学、中世文学、近世文学等日本古代文学的各个部分。是日本古代文学的集成，书名延用了日语的说法“日本古典文学史”。

本教材适用于日语专业三年级以上的本科生，同时也适用于知识扩展、考研以及研究生的专业学习。书中加入了代表性作品的节选，不仅是“日本文学史”课程的教材，同时也是“日本古典文学”课程讲授的合适教材。本教材不仅传授知识，而且关注中日文学的关联，同时重视增强学生思考、研究的意识。

国内的日本文学史教学主要存在三个问题，一是很多高校使用日本原版的文学史教材，存在版权问题；二是不论日本的教材，还是中国国内编写的教材大多受到日本文学界以假名文学为主的视角影响；最后一个是日本的教材在专业词汇的掌握上不适合于中国学生的学习。

此外，中国出版的一些日本文学史的教材，存在编者对日本文学的深度理解不足的问题。

鉴于以上原因，本书的编者开始考虑编写一本更客观，更全面，并适合于中国高校日语专业教学的教材。本教材除了保证丰富的知识量，更多地考虑到中国学习者便于学习的需求。

首先，本教材采用了汉字与作为读音的假名上下一一对照的形式。日本文学史中的人名、地名、作品名等固有名词有固定的发音，对于中国的学习者来说是很难掌握的。本教材不仅为专有名词标注了假名，而且与一般日本出版的教材不同的是采取了彻底的汉字与读音上下一一对照的形式。如“日本靈異記”，日文标记经常简单地标记为“日本靈異記”或者“日本靈異記”、“日本靈異記”，而本教材标记为“日本靈異記”，这样每一个汉字都有其读音上下加以对照，以便于中国的学习者正确地掌握固有名词的发音。不仅如此，本教材对固有名词以外的相对难读词汇也标注了日文读音，以便于中国的学习者轻松地加以学习。

其次，本教材适当介绍了日本的汉文学作品，以恢复日本古典文学史的原貌。日本自古以来就受到中国的影响，存在大量的汉文学作品。虽然日本的中学国语课上都有汉文训读的内容，但是日本编写的日本文学史教材往往强调日本本土的假名文学，较少对日本汉文学作家及其作品做介绍。中国出版的日本文学史教材也往往受此影响。本书弥补了目前国内外日本文学史编写的不足。同时，为了便于中国学习者的理解，在对汉文学作品加以引用的同时，加注了作品的日文训读；在本教材的前半部分——“上古”和“中古”部分的汉文学引文后还加注了现代语翻译。

最后，本书为了便于掌握，把重点词句调整成了黑体文字；为了加强中国学习者对日本文学、文化的理解，适当加入了插图；书后加入了中国、日本对照的文学史年表及固有名词的索引。同时，为了便于中国学生学习，本书采用的是横排的形式；为了尊重日本的记述习惯和照顾中国学生的学习习惯，在所有日本年号后面都附上了公元纪年。

北京外国语大学博士生导师张龙妹教授欣然接受编写组邀请，不顾炎热，利用暑假的休息时间审阅了本教材，在此表示衷心的感谢！

关于教材的语言以及内容，常年担任日本高中国语教师的桥场徹先生以及曾任北京语言大学日语系日籍专家、现受聘于北京外国语大

学日语系的寺内伸介先生（日本大阪大学文学博士）提出了不少宝贵的意见，在此一并表示谢意！

另外，还要感谢北京语言大学出版社的王壮副社长、余心乐老师、梁骁老师，感谢责任编辑郑文全老师、崔虎老师等各位的帮助！他们为本书的顺利出版创造了诸多便利条件。

本教材引文多引自《新编日本古典文学全集》（小学馆）、《新日本古典文学大系》（岩波书店）、《日本古典文学全集》（小学馆）、《日本古典文学大系》（岩波书店）等，特此说明。

最后敬请各位同行、读者给予批评指正。

主编 关立丹
2012年12月31日

目 录

第一章 上代文学	1
第一節 概説	1
1. 時代背景	1
2. 地理的環境	2
3. 口承から記載へ	3
4. 上代文学の呪術性と文学性	4
5. 上代文学の国際性	4
第二節 神話・伝説・説話	5
1. 記紀神話	6
2. 伝説	10
3. 『風土記』	12
4. 氏族伝承と仏教説話	13
5. 祝詞と宣命	15
★ 学習の窓 天照大神と天孫降臨	17
第三節 歌謡・和歌	18
1. 記紀歌謡	19
2. 『万葉集』の成立と性格	22

3. 万葉歌風の変遷	24
4. 『歌経標式』	36
★ 学習の窓 万葉仮名	37
第四節 漢詩文	38
1. 『懷風藻』	39
2. 『万葉集』の中の漢詩文	42
★ 学習の窓 鑑真と阿倍仲麻呂	44
第二章 中古文学	46
第一節 概説	46
1. 時代背景	46
2. 唐風（中国）文化と国風（日本）文化	48
3. 仮名散文の発生、展開と宮廷女性文学の開花	49
4. 貴族的文学の変質	50
第二節 漢詩文	51
1. 三大勅撰漢詩集	51
2. 平安初期の漢詩人	53
3. 平安中後期の漢詩文	57
★ 学習の窓 平安時代における「唐」と「和」	60
第三節 和歌	61
1. 『古今和歌集』以前	62
2. 『古今和歌集』	64
3. 『古今和歌集』以後の勅撰集	72
4. 私撰集・私家集	76
5. 歌論・歌学	76
6. 歌謡	77

★ 学習の窓 「色好み」	79
第四節 物語	81
1. 作り物語	81
2. 歌物語	84
3. 『源氏物語』	91
4. 『源氏物語』以後の王朝物語	100
★ 学習の窓 「もののあはれ」	102
第五節 日記・随筆	105
1. 日記	106
2. 随筆	116
★ 学習の窓 平安文学と女性	124
第六節 歴史物語・説話文学	125
1. 歴史物語	126
2. 説話文学	128
★ 学習の窓 平安文学と『白氏文集』	133
第三章 中世文学	136
第一節 概説	136
1. 時代背景	136
2. 文学概観	137
3. 文学の新しい変化	138
第二節 和歌・連歌・漢詩文	139
1. 和歌	140
2. 連歌	144
3. 漢詩文	148
★ 学習の窓 「抄物」について	151

第三節 日記・紀行・随筆	152
1. 日記	153
2. 紀行文学	155
3. 随筆文学	156
★ 学習の窓 吉田兼好の無常観について	161
第四節 物語・説話文学	162
1. 御伽草子	163
2. 説話文学	165
★ 学習の窓 御伽草子という術語	169
第五節 歴史・軍記物語	170
1. 歴史物語	170
2. 軍記物語	172
★ 学習の窓 南北朝について	180
第六節 演劇	180
1. 能	180
2. 狂言	188
3. 幸若舞	190
★ 学習の窓 世阿弥の能楽論	190
第四章 近世文学	193
第一節 概説	193
1. 時代背景	193
2. 市民文化の台頭	195
第二節 仮名草子・浮世草子・洒落本・その他	197
1. 仮名草子	197
2. 浮世草子	199

3. 洒落本	204
4. 滑稽本	205
5. 人情本・草双紙・その他	209
★ 学習の窓 近世における「粋(すい・いき)」と「通(つう)」	213
第三節 読本	214
1. 前期読本と後期読本	215
2. 上田秋成と『雨月物語』	217
3. 曲亭馬琴と『南総里見八犬伝』	220
★ 学習の窓 近世における中国文学の受容	223
第四節 和歌・俳諧・漢詩・その他	224
1. 和歌	224
2. 俳諧	228
3. 漢詩文	241
4. 狂歌と川柳	246
5. 国学	250
★ 学習の窓 近世の三都	252
第五節 浄瑠璃・歌舞伎	253
1. 浄瑠璃	254
2. 近松門左衛門	261
3. 歌舞伎	266
4. 鶴屋南北と『東海道四谷怪談』	270
★ 学習の窓 怪談文化の高まり	274
日本・中国文学史対照年表	276
索引	293
主要参考文献	303

第一章 上代文学

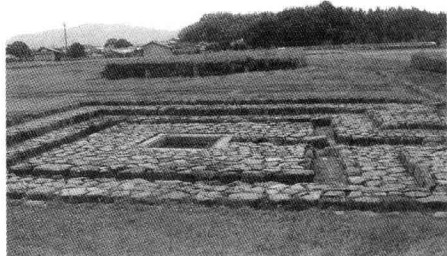
第一節 概説

日本文学史の^{じょうだい}上代とは普通、文学の誕生から、^{えんりやく}延暦十三（794）年の^{へいあんきょうせん と}平安京遷都までを指す。口承文学の時代を最初に置き、やがて漢字の伝来によって記載文学が成立する^{あすか}飛鳥時代を経て、個性的な文学が花開く^へ奈良時代までが、その主要な範囲である。地理的に見ると、都が^{ふじわらきやう}飛鳥地方から^{へいじやうきやう}藤原京、平城京へと次第に北上しながらも、主として^{やまと}大和地方（今の奈良県）に政治・文化の中心が置かれていた時代の文学を意味する。

1. 時代背景

日本列島には、一万年以上前には^{せん ど き}先土器文化の時代があり、人々はすでに石器を持ち、^{しゆりやう}狩猟・^{さいしやう}採集の生活をしていた。^{じやうもん}縄文時代を経て、紀元前三世紀ごろ^{いなさくのうこう}稲作農耕が始まり、弥生時代に入ると、^{きんぞく き}金属器文化も伝わって生産は^{ひ やくてき}飛躍的に発展を遂げ、次第に各地に^{しぞく}氏族中心の小国家が形成されるようになった。四、五世紀には、それらの小国家群も大和地方を^{こんきよ ち}根拠地とする勢力に^{へいごう}併合・統一されて、ここに^{やまと}倭王権が誕生する。そして、四世紀以後から中国大陆や朝鮮半島との

交流が盛んになり、七世紀には遣隋使^{けんずいし}、遣唐使^{けんとうし}の派遣により、隋唐



大化改新の舞台とされる
伝飛鳥板蓋宮跡

の文物・技術・制度などが取り入れられ、国家体制の確立に大きな力となった。大化^{たいか}の改新^{かいしん}（645年）を経て、律令体制^{りつりょう}が整えられ、中央集権の律令国家としての大和朝廷が成立した。また大陸^{たいりく}や半島^{かんとう}の仏教文化などが吸収されて、格調高い飛鳥・白鳳文化^{あすか はくほう}が栄えた。そして和銅三^{わどう}（710）年の平城京遷

都によって奈良時代の幕開けを迎え、やがて絢爛たる天平文化^{けんらん てんぴやう}が生み出された。しかし度重なる権力闘争^{たうそう}や律令制の行き詰まりのために、次第に社会全体に退廃^{たいはい}の気が広がるようになり、桓武天皇の延暦三（784）年に、都は山城国の長岡京に遷り、十年後の延暦十三（794）年には平安京に遷った。

2. 地理的環境

大和地方は、統一国家を形成するのに適した立地条件^{りつち せうけん}を備えていた。東には、春日^{かすが}、高円^{たかまど}、三輪^{みわ}の山々、南には多武峰^{たふほう}、高取^{たかとり}、吉野^{よしの}の山々、西には金剛^{こんごう}、葛城^{かつらぎ}、生駒^{いこま}の山々が青垣のように奈良盆地^{なんばんち}を囲み、多くの支流が合流する大和川が、政治的に重要な港、難波津^{なにわづ}に通じていた。さらに、日本海方面や、伊勢を抜け、東国へ行くのにも適した位置にあった。土地は豊かで、雨量^{うりやう}の少ない、穏やかな気候に恵まれていた。

また、上代文学において、大和に次ぐ比重を占めるのは九州地方である。九州はイザナキノミコトの禊^{みそぎ}の地とされ、天孫降臨^{てんそんこうりん}から神武天皇東征までの、皇室の祖先の活動舞台として、神代^{かみよ}の物語に重

要な位置を占め、熊襲・隼人征討の神話を伝えている。ここは天離る鄙ひなと言われ、日本の西のはてに位置するが、朝鮮半島を望み、また中国大陆との交通路に当たっていたので、当時の日本において世界に向かって開かれた唯一の門戸であった。

3. 口承から記載へ

日本における文学の発生は、いつとも知ることができないが、かなり早い段階から口承による文学が行われていた。文字のなかったころ、神話・伝説・歌謡・祝詞などは、専門的な伝承者の語部らによって、口から口へと語り継がれたのだが、こうした文字によらぬ文学を**口承文学**という。後には、漢字が伝わり、文字による**記載文学**が文学の主流となるが、上代の口承文学は、日本文学の始源を知るのに重要な価値をもっている。

日本に漢字が伝来した最初は三、四世紀ごろ、刀や鏡などに刻まれた金石文としてであるが、それは文字よりも、単なる紋様として受け入れられていた。六世紀に入ると、表意文字としての漢字が自由に使用できるようになり、聖徳太子のころには、進んだ用字法が試みられ、飛鳥時代になると、漢字による文学の記述も行われた。律令体制が整うのにつれて、国家意識も高まり、史書・地誌編纂の気運も興った。それらは八世紀の奈良時代初期に入ると、漢文体や漢字の音訓を使いこなした『古事記』、『日本書紀』、『風土記』などに集大成されていった。

文学意識をもった記載文学は、近江朝以来の漢詩文や和歌の世界にも見られるようになり、八世紀半ば以降、それぞれ『懷風藻』、『万葉集』にまとめられていった。

4. 上代文学の呪術性と文学性

原始未開の社会では、飢えや死など、生命や生活の不安を克服するための呪術信仰^{じゅじゆつしんこう}が盛んで、その呪術的祭式^{さいしき}が共同体の重要な行事であった。上代では、最も神秘^{しんぴ}に満ち、豊かな力をもった言葉はこの呪術の言葉であるが、この尊厳な非日常言語から歌謡や語りごとが誕生するのである。したがって、日本の上代文学には言葉の呪術性が依然として強く残存している要素が見られる。

一方、上代の日本人は中国文化の強い影響を受けて、言葉を呪術から解放し、言葉の自由な力によって文学世界を作り出すことも試みた。たとえば、語部^{かたりべ}たちが語っていた古代伝承は、神々の行動^{かみがみ}を語る神秘的な言葉に満ちていたが、やがて中国から歴史意識が導入されると、歴史の衣^{ころも}を着せられ、歴史上の故事として性格づけられ、文飾^{ぶんしよく}を施^{ほどこ}して語られるようになる。

このように呪術性と文学性の二つが未分化に存在しているところに、上代文学の特色があった。

5. 上代文学の国際性

上代文学のもう一つの大きな特色として、その国際性が挙げられる。まず上代では、まだ日本自身の文字をもたず、記載文献^{まんよう}は万葉仮名を含めてすべて漢字で表記されていた。その上、上代日本では、遣隋使・遣唐使^{ひんぱん}などの頻繁な派遣により、**中国大陸**や**朝鮮半島**の制度・文化を積極的に取り入れた。天皇を中心とする絶対的國家の確立は、律令制という外来の制度によって支えられることになったのである。さらに、仏教をはじめとする中国文化の受容も積極的に進められ、そうした中、格調高い飛鳥^{はくほう}、白鳳文化^{けんらん}、絢爛たる天平文化^{てんぴよう}が生み出された。